

共同研究（特定研究（若手））研究成果報告

幕末地方歌壇の研究
——佐賀藩の場合——

共同研究（特定研究（若手））研究成果報告

幕末地方歌壇の研究
——佐賀藩の場合——

目次

緒言及び研究の概要	三ツ松 誠	3
総論		
古川松根と小車社	三ツ松 誠	11
資料紹介		
解題	25
一、古川松根関係書簡集		
鈴木高靱宛古川松根書簡	三ツ松 誠	31
古川松根宛鈴木高靱書簡等	三ツ松 誠	34
古川松根宛中島広足書簡等	三ツ松 誠	41
重松春香宛古川松根書簡等	三ツ松 誠	44
古川松根宛長沢伴雄書簡等	亀井 森	51

二、小車社關係歌合集

杉野竹弘關係歌合集

『三十六番歌結』

三、南里有隣關係歌合集

付録

關係人物情報

中山 成一 ……………

59

中山 成一 ……………

101

日高 愛子 ……………

111

……………

214

緒言

研究代表者 三ツ松 誠

本書は平成二十九〜三十年度に実施された共同研究である「幕末地方歌壇の研究——佐賀藩の場合——」の成果報告である。本共同研究は、幕末佐賀歌壇の活動実態を明らかにして、その特質を全国的な動向の中に定位することをその狙いとした。そもそも筆者がこの共同研究を思い立ったきっかけは、和歌に重きを置かない平田国学の影響を受けたはずの佐賀の国学者が、当たり前のように和歌を詠んでいたという事実、これが気になったことにある。研究開始にあたって認めた経緯説明の一節を次に掲げよう。

だが当然ながら幕末維新期の平田派国学者の全てが、和歌を遠ざけていたわけではない。そもそも富小路貞直や六人部是香のように、和歌に通じた篤胤の協力者も少なくない。その質は判断しかねるが、幕末の平田派の志士らが歌を学び、そして詠んだ記録は数多目にしてきた。ロシア軍と張り合つてサハリン支配を図つた門人等が北辺の凍える夜に『万葉集』を学ぶ姿は、感動的であつた。

これは本腰を入れて勉強しなければいけないぞ、と思つたのは、幸いにも佐賀でお仕事をいただいていたからである。佐賀は六人部是香經由で平田国学が広まっており、篤胤同様、漢訳キリスト教教理書を利用した復古神道神学を編み出した南里有隣——藩主の娘の和歌の師でもあつた——を輩出し、柴田花守や西川須賀雄など、歌を好んだ平田派も少なくなかつた。そして、南里有隣は実は桂園派であり、彼の周辺には藩主をも含む桂園派の地方歌壇が成立していたのである。あるいは薩摩の桂園派歌人で、御歌所に入った八田知紀は、幽界に関する情報を交換するなど篤胤の影響を受けた人物のだが、佐賀の桂園派歌人も交流を持っていた。篤胤学を——少なくとも部分的には——受容しながら、歌にも注力しており、その面では篤胤どころか宣長からも距離をとる。果たして彼らの中で歌学や国学の諸流派はいかなる関係にあつたのか？

*
かくして幕末佐賀歌壇の実態、また和歌をも詠んだ平田門人の考え方について、迫っていききたいと志すようになった。とは言え、独力でどうにかなるほど和歌史の道は甘くないに違いあるまい。そこで佐賀大学にかつてご勤務だった和歌史のプロフ

エシヨナルや、佐賀藩の文事に通じた若手研究者に共同研究を持ちかけたところ、有難いことに皆さん優しいお返事を下さった。以上がメンバーの中でもっとも頼りない、研究代表者の立場から見た、国文学研究資料館共同研究（若手）「幕末地方歌壇の研究——佐賀藩の場合——」の申請・実施に至った経緯である。

その後の共同研究期間はあつという間に過ぎ去った。肥前佐賀の大名文事は極めて活発であり、見習うべき研究の蓄積にも厚いものがあつた^三。幕末和歌に関してはその資料は数多く、新たな事実が判る^三度に、遙かに多くの判らないことの存在を意識させられる二年間であつた。進むべき道はまだまだ長いが、これまでの作業にお力添えくださった皆様に、見えてきたところをご報告したい。あわよくばご意見を仰ぎたい。かかる意図から編まれた本書は、研究の過程で視野に入った資料の中からいくらかを紹介し、その解題と、これらを残した幕末佐賀歌壇をどう理解するべきかの現時点での見取り図たることを企図した総説とを、付したことになる。

翻つて鑑みれば、ここ三〇年ほどの近世和歌研究は、堂上歌壇への関心によつてリードされたものだったと言えよう^四。良寛や橘曙覧、大隈言道らへの高い評価は後世のものに過ぎず、むしろ同時代的評価が大事だ、という考え方^五からなされる堂上和歌重視の主張は説得力を有する。また身分制社会としての近世の文化は、身分集団との関わりにおいて論じられるべきだ、という点でも、堂上和歌研究の重要性には大きなものがある^六。

二 目立つ取り組みを例示するならば、国文学研究資料館における先行プロジェクトとしても共同研究「江戸時代中期文人大名に見る学芸と思想に関する総合的研究——佐賀鹿島藩第6代藩主鍋島直郷の事跡を中心に——」が在り（研究代表者井上敏幸、平成十七（十九年度）、現在進行中のプロジェクトとしては科学研究費補助金基盤研究C「小城鍋島文庫蔵典籍の解題目録と蔵書印データベースの作成」（研究代表者中尾友香梨、平成三十（令和三年度））が挙げられる。

三 既発表論文を再掲する媒体ではない本研究報告での紹介が叶わなかった研究成果については、続く「研究の概要」に列挙した。
四 画期の有様は、近世堂上和歌論集刊行会『近世堂上和歌論集』（明治書院、一九八九）、上野洋三・松野陽一・中野三敏「近世の歌文の世界」『文学』六・三（一九九五）などで確認できようか。

五 久保田啓一「解説」『近世和歌集』（小学館、二〇〇二）。

六 近世朝廷の歴史的研究における和歌への着目の意義を、筆者はまず藤田覚『江戸時代の天皇』（講談社、二〇一一）、同『近世天皇論 近世天皇研究の意義と課題』（清文堂、二〇一一）などから教わった。飯倉洋一・盛田帝子編『文化史の中の光格天皇——朝儀復興を支えた文芸ネットワーク』（勉誠出版、二〇一八）にも藤田覚「光格天皇をどうとらえるか」が載る。身分論的視座からの近世朝廷文化史の研究史整理としては西村慎太郎「近世公家職研究の展望」『国文学研究資料館調査研究報告』三二（二〇

では一九世紀半ば当時、志士たちの和歌、あるいは藩社会における和歌の盛り上がりは、いかなる意味を持ったのだろうか。この答えを先行研究に求めようにも、近年の学界動向を踏まえた研究があまり見当たらないのが、実状ではなかったか。史学畑出身の自分が見様見真似で和歌の勉強を始めたのも、こうした事情によるものだった^七。

幸いなことに二〇二〇年に入り、浅田徹「近世歌風史論序説——十八世紀から十九世紀へ——」^八や青山英正『幕末明治の社会変容と詩歌』^九のように、近年の堂上和歌研究の隆盛を踏まえつつ、新たな一九世紀和歌史の見取り図を示す研究が登場した。前者で指摘された堂上和歌の相対化と歌人層の全国的拡大、詠み振りの平明化の流れは、本書が主として取り上げた佐賀の小車社のケースにも当てはまる。地域歌壇の成熟が独自の類題集を編むレベルの社中の形成に繋がる事例は他地域にも多く、資料の調査を続けてあらためて研究史に定位していくべきところだろう。また後者が取り上げる詠歌を通じたナショナルな意識の広がりについては、明治初年の宗教改革の担い手になる神道家たちが和歌を学んだ佐賀の場合でも重要な論点になる。同書の説く通り、これは近世文学研究と近代文学研究との関心のはざまにあって取りこぼされがちだった問題なのだが、政治史・思想史的にも無視できない意義がある。

かかる研究史の進歩を追い風にして、佐賀の地域文化史、そしてまた一九世紀半ばの和歌が持った多様な意義、これらを考えるための材料として本書が機能すれば、編者にとっては大きな喜びである。

一二二) が参考になった。

七 その過程で様々にご教示くださった共同研究内外の先生方、また資料の利用に際して便宜を図ってくださった皆様に、深くお礼を申し上げたい。勉強の過程を振り返れば振り返るほど、斯界の常識に全く無知な筆者に呆れた方がおいでなのではないか、と申し訳なくなる。

八 浅田徹「近世歌風史論序説——十八世紀から十九世紀へ——」『近世文藝』一一二(二〇二〇)。

九 青山英正『幕末明治の社会変容と詩歌』(勉誠出版、二〇二〇)。

研究の概要

一、研究テーマ

幕末地方歌壇の研究——佐賀藩の場合——

二、研究期間

平成二十九年年度～平成三十年年度（二年間）

三、研究目的

現在の学界において、近世後期の佐賀藩（及びその支藩）で和歌が盛んなものであったとする認識は薄く、研究もまた活発ではない。しかし地域の古い研究が明らかにするとともに従えば、幕末には藩主周辺の和歌サークル小車社や藩校の和学寮を拠点とした国学系の和歌文化が広がっていたことになる。全国的に見て、必ずしもそれが低調なものだったとは言えないのではないか。そこで本共同研究では、幕末佐賀歌壇の活動実態を明らかにして、その特質を全国的な動向の中に定位することを目的とする。

そのために具体的にはまず、①幕末期の佐賀地域の主要な歌人の経歴を具体的に明らかにする。そして②彼らと交流のあった各地の歌人を具体的にリストアップして、彼ら彼女らの関係を確認できる資料を収集する。③それらの分析を通じて、地域の歌人たちの門流関係・思想的影響関係を復元する。④かかる成果を踏まえて、幕末和歌界の中で総体としての佐賀歌壇が持つ傾向性を、他地域の事例との比較に基いて、抽出する。

四、研究組織（所属は平成三十年年度による）

研究代表者	三ツ松 誠	佐賀大学	地域学歴史文化研究センター	講師
共同研究者	亀井 森	鹿児島大学	教育学部	准教授
	白石 良夫	佐賀大学	地域学歴史文化研究センター	特命教授
	中山 成一	筑紫女学園高校	教諭	
	日高 愛子	志學館大学	人間関係学部	講師

五、研究活動及び研究成果

平成二十九年年度

【概要】

本年度はそれぞれの調査の成果に基づき、佐賀や比較対象地域に関する歌壇の研究を進め、三回の研究会を開催してその進捗状況を報告しあった。メンバーは研究会にあわせて東京圏での資料調査を実施した。また、佐賀での展示会で成果の一端を公開することを予定しており、そのコンテンツ作成を進めた。

【研究会】

◎第一回研究会

・平成二十九年八月八日(金) 於国文学研究資料館

1 日高 愛子 「薩摩における堂上歌壇の影響―垂水歌壇の場合―」

2 白石 良夫 「小城藩歌壇資料「桜のひこぼえ」とその先蹤、直能・直嵩」

3 三ツ松 誠 「近世和歌史研究の動向」

◎第二回研究会

・平成二十九年十二月二十一日(木) 於国文学研究資料館

1 白石 良夫 「十帖源氏の異版と著者書入れ本」

2 亀井 森 「近世後期薩摩の和歌は桂園派だけだろうか。」

3 中山 成一 「幕末佐賀歌壇と杉野竹弘」

◎第三回研究会

・平成三十年三月二十九日(木) 於国文学研究資料館

1 三ツ松 誠 「『当世百歌仙』の弁」

2 三ツ松 誠 「古川松根関係書簡輪読」

【出張資料調査】

三ツ松 誠 八月七〜九日、十二月二十二日、一月二十九〜三十日国文学研究資料館、二月二十二〜二十三日東京大学本郷キャンパス、三月三十日都立中央図書館、三月三十一日国立国会図書館

亀井 森 十二月二十日都立中央図書館、十二月二十一日国文学研究資料館、十二月二十二日立教大学大衆文化研究センター、三

月三十日国立国会図書館、三月三十一日国立公文書館

白石 良夫 八月八日国文学研究資料館、十二月二十二日、三月三十日国立国会図書館

中山 成一 八月七〜八日、十二月二十一日国文学研究資料館、十二月二十、二十二日国立公文書館、三月三十日国立国会図書館
日高 愛子 八月七〜九日、十二月二十二日国文学研究資料館、三月三十日国立公文書館、三月三十一日国立国会図書館

【研究成果】

三ツ松 誠 「中島広足『佐嘉日記』と野中古水」『西日本国語国文学』四、平成二十九年七月、三十一〜四十五頁、査読有
三ツ松 誠 「平田国学と和歌」『国文研ニューズ』五十、平成三十年一月、四〜五頁、査読無

平成三十年度

【概要】

本年度はこれまでの研究成果を、地元佐賀における共催シンポジウムで公表したほか、美術館での展示企画の一部としてその成果を公表している。研究会も二回開催し、これにあわせて東京圏での資料調査も実施した。こうした研究活動を踏まえ、成果の投稿準備や報告書の作成を進めた。

【研究会・シンポジウム】

◎シンポジウム準備会

・平成三十年八月五日(日) 於佐賀大学本庄キャンパス

1 三ツ松 誠 「幕末歌壇のなかの古川松根」

2 中山 成一 「幕末佐賀歌壇と杉野竹弘」

◎第十二回地域学シンポジウム 「幕末佐賀の歌人たち―直正と小車社―」

・平成三十年九月二十三日(日) 於佐賀大学本庄キャンパス

1 三ツ松 誠 「幕末歌壇のなかの古川松根」

2 中山 成一 「幕末佐賀歌壇と杉野竹弘」

3 伊藤 昭弘 「佐賀藩における小車社の人びと」

◎第一回研究会

・平成三十年十月五日(金) 於国文学研究資料館

1 亀井 森 「『史籍年表』伴信友付箋書き入れ本について」

2 白石 良夫 「小城藩の蔵書を充実させた夭折の天才―鍋島直嵩」

3 三ツ松 誠「幕末類題和歌集刊行関係史料輪読」

◎ 第二回研究会

・平成三十一年三月二十八日(木) 於国文学研究資料館

1 三ツ松 誠「古川松根関係史料輪読」

2 日高 愛子「佐賀県立図書館所蔵和歌資料にみる幕末佐賀歌壇―南里有隣、白石鍋島家の和歌活動―」

3 亀井 森「後醍醐院真柱と『神代山陵志』稿本」

【出張資料調査】

三ツ松 誠 十月五日、二月二十二日、三月二十、二十八日国文学研究資料館、十月五日、二月二十三日、三月二十七日東京大学本郷キャンパス、二月八日山口県文書館、二月九日島根県立図書館、二月二十一日茨城大学図書館、二月二十四日西尾市岩瀬文庫、三月二十一日向日市文化資料館、三月二十二日大阪府立中之島図書館、三月二十六日国立国会図書館

亀井 森 十月五日、三月二十八日国文学研究資料館、三月二十九日国立国会図書館、三月三十日国立公文書館

中山 成一 十月四日国立国会図書館、十月五日国文学研究資料館

日高 愛子 十月五日、三月二十六、二十八、二十九日国文学研究資料館、三月十三、十四日佐賀県立図書館、三月二十七日国立国会図書館

【展示】

平成三十一年一月四日～二月九日「佐賀藩十代藩主鍋島直正展」第Ⅱ部「鍋島直正の時代を振り返る」で成果の一部を展示(於佐賀大学美術館)。

【研究成果】

徳安 和博・三ツ松 誠・佐賀大学美術館編『佐賀藩十代藩主鍋島直正展』佐賀大学美術館、平成三十一年一月

三ツ松 誠『『当世百歌仙』の刊行とその周辺』平成三十年度近世文学会秋季大会、平成三十年十月、於愛媛大学城北キャンパス

令和元年度・令和二年度

参考として、共同研究期間終了後これまでに刊行された関連する研究成果を次に掲げる。

【研究成果】

亀井 森「伴信友『史籍年表』刊行前夜―近世後期年表編纂の一齣―」『鈴屋学会報』三十六(二〇一九)

三ツ松 誠『『当世百歌仙』とその周辺』『近世文藝』一一一(二〇二〇)

三ツ松 誠「近代神道の形成」島菌 進、末木 文美士、大谷 栄一、西村 明編『近代日本宗教史第一卷 維新の衝撃 幕末～明

治前期』(春秋社、二〇二〇)

共同研究（特定研究（若手））研究成果報告
幕末地方歌壇の研究——佐賀藩の場合——

令和三（二〇二一）年三月三十一日 発行

編集 共同研究（特定研究（若手））

「幕末地方歌壇の研究——佐賀藩の場合——」

研究代表者 三ツ松 誠

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

〒一九〇—〇〇一四 東京都立川市緑町一〇—三

印刷 前田印刷株式会社

I S B N 9 7 8 - 4 - 8 7 5 9 2 - 2 0 4 - 9

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館